

活水女子大学文学部教授

下川 達彌

73期史



古い話になるが昭和 40 年(1965)に学芸員資格を取得して國學院大学を卒業する私は、本来ならば同年秋に郷里(長崎)に開館する博物館に勤務するはずであった。しかし 3 年間の県立高校の教諭を経てからとなった経緯は「一つの博物館の誕生ばなし」と題して稿を草したことがあるが(博物館研究 37-10 2002 年)、要は開館までの間に計画を大幅に変更する必要が生じ、早い話が新聞社などが企画する展覧会を買い取って開催することや、制作者へ施設・設備を提供する貸館業務が事業の中心となった、美術館的な性格が強い館としてスタートしたためである。そのことで郷土に密着した歴史部門は暫くの間は棚上げされ、そのために大学卒業即博物館勤務という私のラインは崩れたのである。しかし昭和 43 年(1968)4 月になって私は当初の約束通り学芸員として勤務することになったのである。ところが赴任した館はまだ美術館的な色彩を色濃く残していたが、その中から人文系の総合博物館への方向転換への道を余儀なくされたのである。これが『長崎県立美術博物館(Nagasaki Prefectural Art Museum)』であり、以後平成 15 年(2003)3 月の閉館までの 30 数年間にわたって、博物館人として私が勤務する場所となったのである。その間には数多くの思い出があるが、國學院大学の博物館実習の場として、加藤有次先生などの引率で利用されたこともその一つであろう。特にある頃からヨーロッパでの仕事が多くなったことで、加藤先生からヨーロッパの博物館事情についての話をしてほしいと頼まれたこともあり、博物館の展示施設と収蔵庫がそれぞれ分離して別々の町に存在する例などを話したこともある。これらが縁になったかは分からないが、平成 11 年(1999)に現在私が勤務する活水女子大学が博物館学芸員講座を開設し、それに関わられたのが加藤先生なのである。この活水女子大学はエキゾチック

長崎を代表するロケーションの東山手旧居留地の一面にあり、学校へは石だたみのオランダ坂が通じている。校舎は西洋の城を思わせるような洋風建築で、他にもいくつかの明治・大正期の古い建物がそのまま存在している。校名は『ヨハネ伝』の「さらば汝に活ける水を與へしものを」から採られたものが示すように、キリスト教精神に基づく教育をこの地で貫して 138 年にわたって行ってきた歴史をもつのである。この学芸員講座の開設時には加藤先生の他に院友の青木豊、副島邦弘、森醇一朗氏と私が科目を担当してスタートしたのである。それからすでに 8 年が経過しており、現在では私一人が担当として、毎年 20 名近くの学芸員有資格者を送り出しているが、他校の例と同様に社会に出て資格が有効に活用されているかは非常に難しい状況にある。このことは担当者として一番頭が痛いところであるが、これは日本での博物館設立の機運がはるかにピークを過ぎており、それに比べて有資格者は毎年増える傾向にあり、そのことが採用をますます狭き門としているのである。

願わくばこれらの解決方法として、まだ行き届かない分野での積極的な博物館の設立や、博物館資料を利用する出版、ビデオ、映画制作などの分野で学芸員採用を考えていただくと、博物館資料の評価や取扱いについてのトラブルも避けられるのではないかと勝手な考えを巡らしている昨今である。

※ 写真 重要伝統的建造物群保存地区選定校舎

